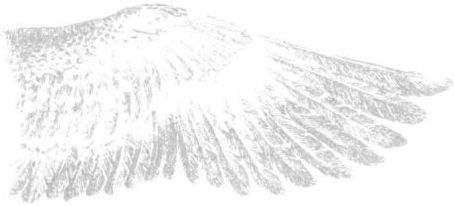

愛を決断するとき

俵　萠子

光風社書店版

愛を決断するとき
わたしの 結婚論

★定価はカバーに入っています

《検印省略》

著者　俵　萠子
発行者　豊島　澂
印刷者　吉田邦一

発行所　株式会社光風社書店
東京都千代田区神田錦町三ノ十四
電話東京(291)〇二三八番
振替東京一二九一三番

乱丁・落丁は御取替いたします。

目

次

Ⅰ 平凡に生きようと思う人に 5
自分をみつける旅 7
恋の相手と結婚の相手 20
好きなタイプとは何か 35
男の母親を見る 49
こころに残る結婚式とは 63
Ⅱ 自由に生きようと思う人に 77
結婚の不幸と独身の幸福 79
結婚の形は一つではない 91
モラルの外の愛 102
女の曲り角とは何か 116

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

年齢からの解放 130
女であることの自信 133
Ⅲ 燃えて生きたいと思う人に 137
八方破れの魅力 139
美醜を超えた人 143
見はてぬ夢を追うことは 156
甘えのかわいさと醜さ 159
愛嬌ある生き方 174
徹した生き方の魅力 179
Ⅳ 美しく生きたい人に 185
個性的なくらし 187

マナーの美意識　200
女の人生と友情　214
醜いおんな　228
何事かに熱中する能力　238
結び——働くことと遊ぶことと結婚　243

装幀　加藤孝雄

I 平凡に生きようと思う人に

自分をみつける旅

いろいろの旅＊

いろいろの旅があった。

一冊分の詩をまとめて、それがまとまったら死のうと思い、高野山へ、ひとりで原稿用紙を持って登っていったことがあった。

親に反対された男に、反対されたがゆえにかえって会いにいった二月の旅もあった。

見合いの帰りに、どうしても別の男を確かめておきたくて、中央線に乗って蓼科（たてしな）へいってしまった夏もあった。

オホーツクの流氷を見る、ただそれだけのためにいってしまった北海道の旅もある。

ひとりの男との別れにつながる長い旅へ出た年のこと。生まれてはじめて、言葉も名刺も通じない国へひとりで出かけてしまったこと。若い人たちと船の上で夜空を見上げたくて出かけた東南アジアの旅、二十年越しの宿願の地に、立ってみるための旅もあった。

かと思えば、私の生き方を変えてしまうのではないかと思う経験に出会った旅もあった。

もちろん、そのほかに無数の仕事の旅、こどもたちをよろこばせるための旅、息抜きの旅、気晴しの旅。食べるため、景色を見るための旅、勉強の旅、私の旅は数えきれない。

けれども、いま思い返してみると、どういうわけか、私の人生の重要な節には、ほとんど旅というものが、かかわりを持っていたことに驚いてしまう。きっとそれは私だけではなくて、かなり多くの人々にとってそうなのだろう。

旅には、食べて見て、遊んで、移動する無邪気な旅もある。かと思えば、思い屈して出かける旅もある。私にとって興味深いのは、むしろ思い屈して出かける旅のほうである。あるいはその人の人生に、重要な意味を持ってしまう旅である。

別れにつながる旅＊

「別れにつながる旅」があると思う。

ひとりの男との関係を絶ちたいと願いながら、日常のなかにいると、どうしても絶ち切れない。彼女がアメリカへ一か月の旅をすると決めたのは、そんな時だった。アメリカには、彼女のおねえさんがいる。そこへ、一か月行ってしまうという。もちろん、彼は反対だった。反対しながら、「どうしても行くというんなら、ぼくは別れる」といい切れないやさしさが、彼にはあった。彼女

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

にも、自信はなかった。なにしろ、二人の間は永かった。高校の時から、足かけ六年にも及んでいた。

羽田の国際線の入り口で、二人が手を振って別れた時、二人はまだ決心がついていなかった。心の中に、かすかに別れの予感を聴きながら、しかし

「きっと、三日に一回、手紙を書くわ」

と彼女はいった。

「きっとだよ」

と彼もいった。

でも、フランス語を習ったことがある彼女は、〈Loin dex yeux, loin du coeur〉（まなこより遠去かる者は、心より遠去かる）という言葉が、歌のルフランのように頭の中で鳴っているのを聴いていた。

三日の手紙が一週間になり、一週間が十日になり三週間になったころ、彼女はもう一か月姉の家に滞在しようと決めていた。思い返せば、まるでこのことあるのを予期していたように、彼女は勤め先に辞表を出してきていたのだった。

別れは、こんなふうにして可能になることがある。

三か月後に帰国した時、羽田に彼はいなかった。私の知っているそのお嬢さんは、いま、アメリカで出会った日本の商社の人と結婚してベイルートに住んでいる。

私にも、そんなふうにして別れた男の人がいた。

ひどいことに、私はその人と正式に婚約していたのだった。すでに指環もかわしていた。それなのに、私は、ほかの男の人たちと、旅に出てしまった。結婚式の日が近づくにつれて、彼との結婚にふっきれないものが拡がっていた。私は、ワイワイ騒いでいるボーイフレンドたちに誘われるまま、ひょいと出かけてしまった。

さすがに婚約者に、そのことはいえなくて、会社のレクリエーションだといってあった。けれども運命というのは皮肉なもので、島へ渡ったとたんに台風がきた。シケは、三日も続いて、帰れなくなってしまった。心配して会社へ電話をかけた婚約者は、私の旅が会社のレクリエーションではなかったことを知った。

先日、二十年ぶりに、旅先の大阪のホテルで、その時の婚約者を見かけた。すっかり髪が白くなっていた。思わず立ちすくんだ。柱のかげから、じっと彼を見つめた。その人は、外人のバイヤーのような人たちと、しきりに握手している。すっかり、こどもが二、三人あるような中年男になっていた。当り前のことなのに、私は妙にそのことに感動してしまった。しかし、あい変わらず、実直そうな表情を、彼の中に見つけたとき、私はしみじみ

(この人は、私のような悪い女と結婚しなくてよかったのだ)

彼の幸運に握手したいような気持ちであった。

出発の旅＊

「出発の旅」がある。

その人と、もう他人の関係ではなくなってしまおうと決心した時、女は〝その日〟を旅で飾ろうとする。他愛ない女の感傷と嗤う人もいるが、私は嗤わない。むしろ、そういう女心が好きである。

新婚旅行がこんなにもはやるのは、だれの心にも、〝その日〟を旅の思い出と共に飾りたい欲求があるからだろう。井上靖さんの『猟銃』という作品の中に、〝その日〟を旅で飾った美しい文章がある。

「時雨に洗われた山崎の天王山の紅葉の美しさは今も私の目にあります。どうしてあんなに美しかったのでしょう。私たちは駅前の有名な茶室妙喜庵の閉ざされた古い門の屋根の下で時雨をやり過ごしながら、駅のすぐ背後から急な勾配をなして大きく目の前に立ちはだかっている天王山を見上げて、思わず二人ともその美しさに息を呑んだものでした」

「あの日が私たちが初めて二人だけの時間を持った時でした。私は朝から京都の郊外を次々とあなたに引っ張り廻されて、もう身も心もくたくたに疲れておりました。あなたもお疲れになっていらっしったのでしょう。天王山の急な細い坂道を登りながら、愛というものは執着だ。僕が茶碗に執着しても悪くはないでしょう。それならあなたに執着してどこが悪いんです。もう滅茶苦茶なことばかりおっしゃっておりました。それからまた、こんな美しい天王山の紅葉を見たのはあなたと僕

と二人きりです。二人きりで同時に見てしまったのです。もう取り返しはつきはしません、まるで駄々っ子の恐喝でございました」

自殺した彩子という女性の遺書の中にある文章だ。

燃えるような紅葉を心に刻んで、二人だけの人生の旅をはじめる新婚もいれば、取り返しのつかない愛の闇に分け入ってゆく二人もいる。いずれも〝出発〟である。いちばん哀切で美しいのは、たった一度の出発の旅を、別れの旅にする二人かもしれない。そういう旅が、やはり井上靖さんの『憂愁平野』の中に出てくる。

「確認の旅」もある。

その人と別れられるのかどうか、あるいはその人を愛しているのかどうか。ゆっくり考えてみようと思って旅に出る。旅に出て、答えが出ることもあるが、出ないこともある。私の友だちに、こんな人がいた。彼女は別れたいと思っていた。別れられるものなら、別れようと思っていた。いつか何かの本で見て以来、心に焼きついていた野付半島の立ち枯れた樹木を見にいった。足を、冷たい湖水の中につけたまま、木々は立ち枯れていた。そういう不毛の景色を、長い間彼女は見たいといっていた。

「人間を寄せつけない荒涼とした風景の中で、私はやっと一つの決意を持ちました。独りで生きてゆけそうです。明日、厚岸を回って釧路へ出ます。野付半島は、やっぱり独りで見る景色でした」

という葉書を、私は貰った。やっと決心したのだな、と私は思った。
二週間たって、彼女に会った時、私はもうバカバカしくなって、笑い転げてしまった。
「上野に着いたら、彼が待っていたの。ふいに柱の陰から出てきたの。そうしたら急に、私の心に灯がともったようになって、やっぱり私はこの人を愛していたのだとわかった。彼ったら、私が居なくなって、いかに私が必要だったか、わかったんですって！」
なーんだ。ゴチソーサマ。なにが野付半島だ。独りで生きてゆけそうです、だ。アホラシイ、と私はいったが、考えてみれば、これもまた彼女にとっては、必要な旅だったのかもしれない。別れを試みて、ぎりぎりのところまで自分を追いつめて、でもやっぱり彼を目にしたときの心のときめき。それを彼女は旅によって確認することができたのだから。人の心はおもしろいもので、自由を失った時、自由が見え、日常を立ち去ったとき、かえって日常の中の自分が見える。

自立の旅＊

私にとって重要な意味を持った旅はいくつかあるが、その最大のものは、やっぱり三十代の後半に、ひとりで世界を一周してきた旅であったろう。
それまで私は、ひとり旅にあこがれながら、ひとり旅の出来ない女だった。父親の手のひらから

夫の手のひらに移され、二人の子を産んだといっても、いつも自分を守ってくれる人が必要だった。たまにひとりにならざるを得ない旅があると、ひとりであることの緊張で、かえってくたびれ、落ち着かなくなってしまうのだった。

その私が、仕事のためとはいえ、生まれてはじめて、それもいきなり外国へ、しかも世界一周などということをやったのだから、私にとっては、大変な事件だった。その旅を決心してから一年半私は準備し、いよいよ旅が近づいてきてからは、だんだん行きたくなくなってしまう自分とたたかわなければならなかった。

迎えてくれる人がだれもいない異国の空港。そこにひとりで降り立った時ほど心細いものはない。お金を、その国の通貨に替えなければいけない。チップは、旅行案内書で読んだけれど、ほんとうにあの金額でいいのだろうか。私の背丈の二倍くらいある大男が、荷物を持ってやるという。ほんとうにポーターだろうか。いくら払えばいいのだろう。生まれてはじめて見た金は、単位がわからない。タクシーに乗る。英語で話しかけてみる。通じない。仕方がないからホテルの名前を書いた紙きれを見せる。うなずいて走り出したが、はてどこへ行くのやら。言葉の通じない相手と、黙りこくってタクシーに乗っていると、息苦しくなってくる。

いちばん心細かったのは、西ドイツのボンの空港に着いた時だった。ちょうど夕方の時間で、私は赤い大きなサムソナイトのスーツケースを持ち、黙ってタクシーに乗りこんだ。背中がパンダの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com